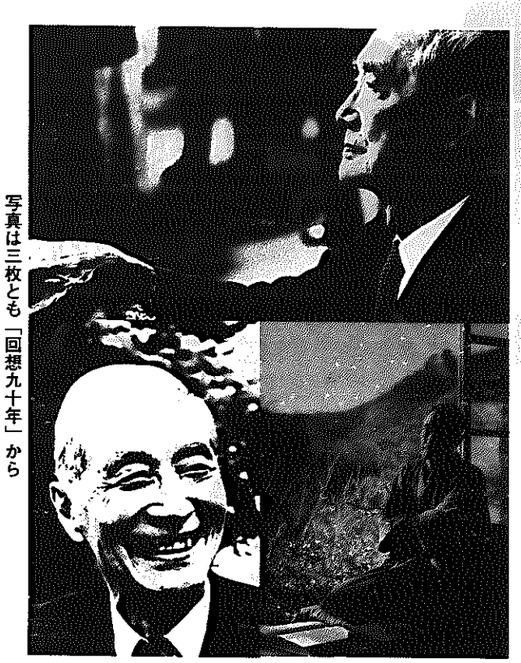
市民談話室

投稿をお待ちしています。この「市民談話室」は、市民の皆さんの意見交換の場です。テーマは自由です。あなたがふだん思っていることをお書きになって気軽にお寄せください。紙面の都合上、文を短くすることがあります。あて先は、〒950―12　白根市大字白根一二三五　白根市役所企画財政課広報広聴係です。

幼きころ白根に育った

高橋誠一郎

荒木　宏さん（和泉・農業・64歳）



写真は三枚とも「回想九十年」から

高橋誠一郎は、明治十七年、新潟江戸時代の最後を飾ったといわれる豪商回船問屋、津島屋の一人息子として白根（蔵主）に生まれました。

母は蔵主の元大地主、須田勝十郎の娘です。父の次太郎は、祖父の次郎左衛門の死後、わずか十九歳で家業を継ぎましたが、そのころ津島屋は事実上倒産していました。

誠一郎の生後まもなく、次太郎は家屋敷を人手に渡し、祖母は新潟に、母と誠一郎は蔵主に預けて単身横浜へ赴きました。

誠一郎が四歳の秋、祖父の次郎左エ門の時代に新潟に滞在していた貿易商、吉田健三（吉田茂元首相の養父）の力添えで、一家は舟で信濃川を上り、長岡から人力車で直江津を通り、碓氷峠を経て、横川から汽車で上野駅に迎えに来てくれた父とようやく横浜へ落ち着いたのです。

その後、誠一郎は横浜の老松小学校から、福沢諭吉の最後の門下生として慶応義塾に入り、ロンドンにも留学、慶応義塾の塾長代理を経て、戦後初の吉田内閣の文部大臣として六・三・三制教育の基を築きました。

以来、学士院、芸術院長を歴任するなど、昭和五十七年二月九日、九十七歳の高齢をもって大往生されるまで多くの功績を残されています。

「私の履歴書」や「回想九十年」によると、四歳まで母の実家にいたころは、一つ年上の穣平と二人で、向かいにあった藤宮三九郎の大地主同士の番犬をまねて、ワンワンとかけ合ったり、にわとりが卵を生むまねをして顔を真っ赤に力んで「生まれたかね」「まだ生まれない」といって遊んでいたりしたそうです。

歳末たすけあい運動（12月1日～31日）

季節の移りと変わる風景

新潟も近くなったかのよう

関根征子さん（北田中・会社員・42歳）

虫の音や草花の季節の移り変わりを知るころ、ライフスタイルも夏から秋へ。食卓も、食欲の秋にふさわしい内容で豊富に飾られています。

時の移りを知るかのように、国道8号線も団地が出来、工業団地が出来、白根から新潟へとその距離も短くなったかのようです。

一日に一度、救急車の音。それを聞くと、長男の自動車事故、主人のけが、お母さんの死など今さらのように思い出され、健康というもののすばらしさを身にしみて感じています。

市民文芸

俳句

霜枯れて我が誕生花淋しけり　渡辺　勤

川柳

ボテロ展見てダイエット止めにする　中村　尚治

火中の栗拾う火箸は誰が持つ　西条　ムラ

宅配便母と娘の連結器　野内熊太郎

アルバムが幼い頃を呼びもどす　早川　英男

割符だけ残して荷の遺言書　山岡　フミ

逃げ道を探す総理の二枚舌　吉川　彰

音なしの構えて毒舌無事反らし　吉川　末吉

十字路で袂を分かつ右派と左派　米野　光雄

素顔では笑えぬピエロの厚化粧　渡辺　ミヨ

秋刀魚焼く煙にむせている金貨　今井　七郎

幼妻失敗しても愛される　今井　タエ

夢に見る父いつまでも若くいる　岡村　清

くせのある宛て名で母の荷が届く　織田　セツ

嫁ぐ娘が父の涙を盗み見る　後藤マサノ

難関突破幼稚園からある関所　佐藤トミノ

傑作の赤い炎を抱いて寝る　佐藤　ヨキ

見て見ないふりして夫も子を育て　高橋祐四雄

定年で背負い続けた荷を解く　竹石　甚五

幼児をアニメで誘うテレビ局　田中　成子

友と寝て話のつきぬ旅の宿　田村　恒夫

独り身に気軽に翔べる羽根がある　長井　徳市

短歌

広野原よろづ千草の枯れ伏して
残る芒穂宙を掃く如　中村　京

歳末たすけあいに思う

寝たきりの祖母が慰問に感謝

高野ミツさん（中大郷・主婦・61歳）

昭和六十一年も、あとわずかになりました。今年最後の募金運動「歳末たすけあい運動」が各地で行われています。この時期になると〝またか〟と軽く思われる人も多いのではないでしょうか。でも、このような善意による寄付が、恵まれない人たちに活用されているのです。

私の家では、九十歳のおばあちゃんが寝たきり病人になっています。お盆や正月になると、おばあちゃんの所へ社会福祉協議会の御慰問に、民生委員の長谷川邦夫さんが丁寧にお見舞いに来てくださいます。

寝たきりのおばあちゃんは、やさしい言葉で慰めてくれる長谷川さんに、手を合わせて感謝の言葉を述べて喜んでいます。また来る歳末慰問に長谷川さんがいらっしゃるのを、心待ちにしている様子です。私も、おばあちゃんを看病しながら真心こもった慰問を身をもって経験し、「愛の募金」に人と人とのふれあいを感じました。

小さな善意による市連合婦人会の「一円玉寄付運動」も、大きな成果を上げていると聞いています。皆さん、真心込めた愛と善意で「歳末たすけあい運動」に協力しようではありませんか。

楽しみながらのボランティア

参加してよかった！

ボランティアサークル「しらはすの会」

青木きよ子さん（大通一丁目・主婦・60歳）

さわやかな秋晴れの九月三十日、青年教育センターで行われた「脳卒中等後遺症者友好団体交流会」に参加しました。

市内や近郷の皆さんが明るい顔で、不自由な身体をいたわり合いながら、大型バスなどで続々と参加され講演や自由交流、なつかしの歌謡ショー、日本舞踊を楽しみ、「来年はもっと回復した姿で会いましょう」と和やかに散会しました。

分水、見附、岩室などから来た人たちは、玄関で「白根はいいねえ、ボランティアのお手伝いの人がいて……」と、開口一番うらやましがっていました。

ボランティアの存在は「食卓の花」に例えられるとか。はしと茶わんがあれば食事はできる。でも、そこに花があるだけで、なおいっそう潤いがある。自分自身のささやかな日常生活の中で当然の行為が、ボランティア活動の第一歩だそうです。平等な人間関係の中で自発的に、社会のため、人のために尽くしたい、役立ちたいという気持ちは本来人間だれしもが持っている尊い心だといわれています。

しらはすの会では、病院の患者の話し相手、車いすの手伝い、また、手作りおもちゃの製作で施設の子供や保育園児に少しでも夢のあるぬくもりが伝われば、と、手弁当で罪のない世間話に花を咲かせ、楽しみながら張り切っています。お仲間の参加も呼びかけていますが。

グループ紹介⑤

星の会

神田さんの事務所が会員のたまり場。酒を飲みながらの星の話は深夜に及ぶこともある（左から神田さん、小千田さん、長沢さん）

観測の企画あれば協力したい

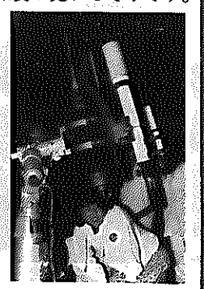
この会は、神田松太郎さん（中央通3・36歳）と小千田節男さん（同・31歳）、長沢良弘さん（同6・24歳）の3人が4年前に結成した天体観測のグループ。

最近は町の光が多くなったため、観測場所は主に矢代田や村松の山などで、ときには県外へも出かけます。「以前は家でも8時ころからよく見えたんですが、今は10時、11時にならないと……」と神田さん。また、毎年夏には観測会を兼ね、家族を連れて旅行に出かけています。

理科センターが8月に開いた星座観察会では、望遠鏡を持ち寄って応援に駆けつけました。「子供たちが土星の輪や月のクレーターが見えたと喜んでくれて、うれしかったですね」と小千田さん。

会の活動と言っても、望遠鏡で星をのぞく時は一人。観測は個人で行うことも多いようです。「それで特に会員を増やす考えもないんですが、星好きの仲間どうしで技術を高め合うための交流はしていきたいですね。そして、これからも理科センターの観察会などの催しがあれば、どんどん協力していきたい」と3人は話してくれました。

来年9月23日、新潟では50%程度の部分日食が、沖縄では金環食が見れるそうです。



8月に理科センターが行った観察会に、会では長沢さんの20センチのシュミット・カセグレン（写真）など3台の望遠鏡を持ち寄って協力